



TITLE:

日食観測の経験

AUTHOR(S):

伊達, 英太郎

CITATION:

伊達, 英太郎. 日食観測の経験. 天界 1935, 16(175): 11-12

ISSUE DATE:

1935-10-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167133>

RIGHT:

日 食 観 測 の 経 験

兵庫縣 伊達英太郎

生れて初めて日食なるものを多少共科學的な眼を以て見たのは1927年6月29日だつた。此の頃には、もう大分天文の方の知識も分つて來てゐた時分で、當時科學畫報社で、五藤式甲號望遠鏡と云つて大々的に賣出してゐた、シングル對物レンズながらマア其頃では唯一のアマチュア用天體望遠鏡を持つてゐたので、晝過ぎから友人と共に觀測準備に餘念なかつた。危な氣な屋根上の火の見臺に望遠鏡を据えて手ぐすね引いて待ちかまへた。此の日は丁度學校の試験前だつたが其の時の頭の中には試験の事なんか全然考へてをらず、只物心づいて初めての日食の有様を想像して胸躍らせてゐたのです。32度を超す猛暑の中に立ちつくしたものです。

やがて時は來た。16時20分、50倍の視野中に輝いてゐた太陽の一部が知らぬ間に凹んで來た。「初まつた！」歡喜の震え聲だつた。「どれどこに」と友人が一すのぞく。待つ間ももどかしくすぐアイピースへくらひ付く。食はドンドン進行して圓い黒い月は遠慮無く廣大無邊の太陽の慈顔を蝕んで行く、私は寶島で寶物を岩の間で見付けた様に目に押しつけては感嘆した。「妙なものだナア」と思つたり「こんな宇宙の大異變を知らぬ顔に世間の人はどうしてゐるのか」と一般人をあはれに思つたり、急がし氣に道行く人に大聲で怒なつてやらうかしらと考へたり、又「日食の時刻を秒迄豫報する數學、天文學の力の偉大さに感心したりしてゐる中に17時には $\frac{1}{3}$ が食されて食甚となつた。馳せつけた一人の友人と交る交るアイピースを覗きながら、珍象に驚嘆すると共にこの珍象を眼の邊り見せてくれる望遠鏡に感謝した次第です。其中に又黒い月はどんどん進んで前と反對に黒い圓盤像は刻々太陽面から退き初め17時40分完全に復圓した。皆ホツと息をついた。太陽は知らぬ顔にカンカン照りつけてゐる。往來には吾關せずと云つた顔の人々が急がしさうに歩いてゐる。「こんな面白い現象を見もせず」と氣の毒に思はないでゐられなかつた。

$\frac{1}{3}$ 食されたら少しは氣溫も下るかと思つてゐたが、そう云へば一寸四圍が僅かながら薄暗くなつた様であつたが、氣溫迄は氣付かなかつた。

其後度々日食はあつたが曇天等の爲めに見ず、昨年のロイツプ島の日食を迎へたのですが、ロイツプでは美事に成功された由で結構でしたが、内地特に近畿地方では早朝からカラツと晴れた日本晴れに、大分アチコチで日食を見んものと大勢の人が期待されてゐた様ですが、食の初まる直前或は初虧の直後、恰も「そんなものは見てはいかぬ」と云つた天の御使ひの如き黒い濃い雲が太陽をかくし、其上雲量は益々増加して、遂に雨さへ降り出す始末で、私の方でも寫眞撮影装置を取付けた 11c.m 反射赤道儀や時計に用ひる 36m.m 小屈折鏡にアワテテ覆ひを掛けると云ふ具合で、美事に不成功に終つた。しかも午後には「サアもう見ても良ろしい」とばかり黒雲の幕は切れ、何事も無かつた様に日が照り出した時には實際腹が立つて泣き度い位だつた。「浮世はとかく儘にならぬ」ものです。

希はくば、來年の北海道日食には日本全土快晴に恵まれる様祈つて擱筆します。駄文をお許し下さい。
(10. 9. 12)

◆◆寄稿者の紹介◆◆

天界十月號 (174 號)

- ★ 村上春太郎氏 (日食回顧四十年) 理學士、第七高等學校教授
- ★ 稻葉通義氏 (講座二重星の話)
理學士、花山天文臺勤務、東亞天文協會幹事、二重星觀測を專攻す
- ★ 山本一清氏 (天文用語に關する私見)
理學博士、京大教授、花山天文臺長、東亞天文協會會長
- ★ 木邊成麿氏 (1935 年度火星觀測)
木邊派本願寺法嗣、東亞天文協會機械課長、鏡の研磨の妙技を持ち、熟練なる觀測者 (現住所 滋賀縣野洲郡中里村木邊)
- ★ 的場健一郎氏 (須彌山儀考)
幸福無盡株式會社經理課長 (現住所 和歌山市寄合町二丁目)
- ★ 新帶國太郎氏 (滿洲國の標準時に就いて)
滿鐵地質調査所在勤